



第 18 回

江戸焦土作戦・勝 海舟

作家 童 門 冬 二

勝の攻守両面作戦

勝海舟といえば、明治維新のときに政府軍の参謀西郷吉之助との会談で、百万の市民と江戸の町を救った、ということで名高い。しかしこの会談交渉はスムーズにいったわけではない。というのは、西郷吉之助のほうが戦意旺盛で、

- ・前将軍徳川慶喜の首を取る
- ・江戸城は破壊し、江戸の町は全部焼き尽くす

という作戦をもって臨んでいたからである。旧幕府の全権を託された勝海舟にすれば、このことを十分に踏まえなければならない。勝は攻守両面作戦を立てた。前将軍徳川慶喜が完全に戦意を失い、「天皇には背かない。恭順する」という姿勢を保っているのを、平和主義者の勝にすればなんとかしてこれを生かしたい。しかしそれを無視して政府軍が無理やり江戸を焼いたり慶喜を殺そうとするならば、やはり幕臣としての勝は対応策を考えなければならない。勝が考えたのは次のような作戦だ。

- ・政府軍に江戸の町を焼かれる前に、こっちの手で焼いてしまう
- ・そのためには、新門辰五郎を代表とする博徒連中を集めて、この計画を話す
- ・しかし、百万の江戸市民をこの作戦に巻きこむわけにはいかないので、房総方面に退避させる

・そのためには江戸近辺の船頭たちを集めて依頼をする。すなわち、隅田川や江戸の海岸に船をたくさん集め、市民をどんどん運んでもらうようにする

・この作戦を展開するうえでの市中防衛には、旧幕府の武士たちはもう役に立たない。そこで魚市場の威勢のいい連中に出刃包丁を持って集まってもらうなどということである。

慶応四(一八六九)年の正月、勝はそんな作戦を胸に抱いて新門辰五郎ほか多彩な人物たちに集まってもらった。

「実はこういうことだ」

と自分の作戦を話すと、みんな笑い出した。とくに、いろは四十八組といわれる消防組織の連中がこういった。

「われわれはいつも江戸の火事を防ぐ役割を負ってきました。それが今度は火をつけるんですか?」

「そうだ。思い切りやれ」

「こいつはどうも」

消防組織の連中は顔をみあわせて苦笑した。勝はいった。

「大事なのは江戸の町に火をつけることよりも、江戸の市民をいかにして房総方面に退避させるかだ。ここはひとつ船頭さんたちお願いしますよ」船頭はみんなうなずいた。

「すぐ船を集めます。その点はどうかご心配はな

さらないでください」

「ありがとう」

魚市場の連中に、出刃包丁を持ってこの作戦遂行のときの警護の役を頼むとみんな承知した。なかには、

「あしたちは、出刃包丁でサツマイモ(薩摩軍)をぶっ殺しましょうかね」

という勇ましい者もいる。勝は苦笑した。

捨身の成功

しかしこのときの江戸城には、まだまだ主戦派がたくさんいた。「今回の一連の政治事件はすべて薩摩藩の謀略によるものである。従うわけにはいかない。したがって薩摩藩とあくまでも戦うべきだ」という論がかなり強く主張されていた。

京都にいて身近にそういう状況を経験してきた前京都守護職で会津藩主の松平容保(かたもり)や、その実弟で兄の補佐をした京都所司代松平定敬(桑名藩主)や、前陸軍奉行兼勘定奉行の小栗上野介、あるいは新撰組の生き残り近藤勇や土方歳三などはすべてこの論に賛成していた。一言でいえば、

「江戸城は明け渡さない。あくまでも籠城して政府軍と戦う」

という意気ごみだった。慶喜は弱った。慶喜は一橋家の養子にはなったが、もともとは前水戸藩主で尊王攘夷論を唱えていた徳川斉昭の息子だ。慶喜にも勤王論は染みこんでいる。したがって、「朝敵などという汚名を蒙って、天皇に背くのはまっぴらだ。天皇の命には背けない。あくまでも従う」

と恭順の姿勢を示している。それなのに、江戸城に戻ってきた主戦派たちはしきりに「戦え、戦え」と息巻いている。慶喜にとっては非常に困った存在であった。

勝がその慶喜に自分の作戦を話した。そして、

「もちろん、本気ではありません。江戸の町を焼いてしまったら、せっかくのあなたの恭順の姿勢が無になります。これは、主戦派たちを牽制する意味の作戦です。わたしはあなたを支持します」

そう告げて、勝は、

「ですから、この際思い切って主戦派を全部クビにしてください」

と頼んだ。慶喜は勝の真意を知った。いまは、勝以外終戦処理のできる人間はいない。勝は西郷吉之助と親しい。それが頼みだ。慶喜は勇を振って、松平容保以下を罷免し、それぞれ郷里に帰ることを命じた。容保たちは不完全燃焼のまま大きな不平不満のきもちを抱きながら藩地に戻っていた。

こうして主戦派を一掃すると、勝は本腰を入れて政府軍との交渉をはじめた。かれの頭の中にあっただのはあくまでも百万の江戸市民の無事だ。

(戦争は武士が勝手にはじめたものだ。市民を巻きこんではならない)

江戸っ子の勝はそう考える。しかし本気でないにしても、平和交渉が決裂し政府軍がどうしても慶喜を殺し江戸を焼くというのなら、

(そのときは、本気になってこっちの手で江戸を焼き尽くすぞ)

という決意は固めていたのである。いわば、崖っぷちに立った勝の最後の抵抗作戦であった。

こういう気迫は相手の西郷吉之助にも伝わる。

(勝先生は死にもの狂いだ)

交渉の過程で西郷はそう受けとめた。西郷の断によって、文句をいう政府軍の将兵を押さえこみ、江戸城は平和に開城されることになった。西郷も新政府軍全体に対し、

「江戸城攻撃を中止せよ」

と命じたのである。江戸が無事で市民もその生命を保ち得たのは、勝海舟のこの捨て身の"江戸焦土作戦"にあったとっていいだろう。